

言語構造から学ぶ

「英語学習法入門テキスト」について

1990年、日本アイアールは、「知的財産活用研究所」を発足し、世界で通用する、戦える特許明細書を作ろう！というスローガンのもと、翻訳が難しい「曖昧日本語」に対して「平明日本語」の必要性を訴えて来ました。この活動を支えてきたのが篠原先輩です。

先輩とのご縁は、「日本から出願した米国特許明細書の読解に多くの技術者や知財部員が困っている」という、私のボヤキから始まりました。先輩は、自分の目で確かめて「なるほど、これはちょっと酷いですねネ。明確さが求められる特許の世界までが、こんな状況になっていることが信じられないです」と。

先輩が特許の世界へ足を突っ込むキッカケとなったのが、恐らく「このままでは日本の特許は世界で通用しない」という危機感であったと思います。そして英語が全く出来ない私とアレコレと話すことで「やはり日本の英語教育システムに問題がありそうだ」と、改めて感じたようです。

先輩は私に「なぜ英語が苦手なのか、その理由は何か、ではどうすれば良いのか」と言われても、「私のアタマが悪いからだ」と答えるしか無い。しかし先輩は、YOUの責任ではない、学校での英語学習法に問題あったからだ、と、慰めてくれた。そして数日後、これまで見たことも、聞いたこともない切り口からのテキストを作成してくれた。それが、このテキストです。

このテキストで強調されているポイントは「多くの日本人は、残念ながら日本語とその文化が抱えている問題について深く考えることはなかったです。つまり、**“文化が言語を作り、言語が文化を育てる”**ということに対して、無神経でした。それが母国語と英語を対比する視点を持ち合わせていなかった理由です」と。

そして我々日本人が世界へ「物・事・考え」を誤解なく分かりやすく伝えるためには、**「平明日本語」**を強く意識する必要に迫られていること。それは、翻訳ソフトの支援が受け入れやすい**「やさしい日本語」**のことでした。まさに目から鱗が落ちました。**(*)先輩は、このテキストを基に「USP パテント 解体新書 (306P)」を、2004年4月15日に発行しました。**

研究所の皆さんへ、

日本人は、何故英語が苦手なのか、

私、篠原がこれまで考え続けてきたことを纏めてみました。

1. なぜ？英語を習得する必要があるのか
2. 日本人は、なぜ英語が苦手なのか (1/2)
3. 日本人はなぜ英語が苦手なのか、(2/2)
4. 文化と言語について
5. 西欧文化について：文化が言語をモノの観方、考え方と言語を知る
6. 日本文化について：モノの観方、考え方と言語を知る
7. 日本語と英語の違い
8. 従来 of 英語教育の間違い (1) 英文和訳
9. 従来 of 英語教育の間違い (2) 言語として扱っていない
10. 従来 of 英語教育の間違い (3) 文化英語の押し付け
11. 解決策：文明としての英語を習得する
12. 解決策：「英語 OS」をインストールする
13. 解決策：英語のルールで戦うしかない
14. 「英語 OS」のインストールの方法をどうするか
15. 日本語は、世界の知的財産の一つである

なぜ日本人は明快な文書を作れないのか

01. 露骨にもの言うことをはばかりる心情が働く
02. 文書を重視する文化が無い
03. 他者を説得する気迫に欠ける
04. 明確に断定して、結果責任を取るのが怖い
05. 文化、信条、民族を異にする他者への理解が薄い
06. 論理的に物事を進める人は嫌われる
07. 論理的思考と表現に関する訓練を受けていない
08. どのように文書を構成し記述するかの訓練を受けていない
09. 文化に基盤を置いた日本語と文明事項を記述する日本語が頭の中で区分されていない
10. 外国語能力が低いため、母語を比較検討することができない
11. 日本語の構造が重構造のため明確に書くのに適していない
12. 難しく書くことが「えらい」と思っているバカもいる
13. 対象外国の知識(ルールや民族性など)が欠けている

1. なぜ？英語を習得する必要があるのか

日本国民の誰もが英語を学ぶ必要があるとは、考えられません。中学での義務教育で必要と言うならば、その目的は、英語という存在を通して言語への興味を持たせ、日本語力の向上に役立てることにあるのではないのでしょうか。

「グローバル」な環境で仕事をせざるをえない人、そのような環境で仕事をしたい人にとって、英語の修得は必須の課題です。

英語を修得する目的の一つは、自分自身と、属する集団（会社など）のための「インテリジェンスサービス」力の向上にあります。日本語というバイアス（bias）が掛かった情報で海外の事柄や外国の人々の考えを理解したつもりになることは、大きな危険をもたらします。もしビジネスをしているなら、失敗する最大の要因となります。

2. 日本人は、なぜ英語が苦手なのか（1/2）

日本人が英語苦手であることは、自他共に認めるところです。その優秀な頭脳との対比において、“日本の七不思議の一つ”などと西欧人にかからわれたりします。“頭が良いのに、たかが英語ぐらいできないのはおかしいじゃないか”、というわけです。しかし、苦手なのは、当然なのです。以下に、その要点を記します。

人は言語（母国語）で考えるので、観方や考え方の違いは、処理する順序に現れます。英語と日本語の順序が違うことは、日本語処理手順にはそのままでは乗らないこととなります。

コンピュータ風に言えば、日本語オペレーティングシステム（OS）では、手順が違うので、処理できないこととなります。処理不能の情報が入ってきたときの反応として、最も自然なのは、拒絶反応です。つまり、英語を言語として受け入れ処理することを、玄関口で締め出すという対応になってしまいます。

英語学習は苦痛でしかない。異なる処理手順でモノを考えようとすることは、至難の業であり、頭脳に多大の負荷を掛けることとなります。その作業は明らかに

苦痛であり、とりわけ、なぜ異なるのかという理解無しに、ただ闇雲に外国語を覚えることを強制されれば、その苦痛はさらに増えるだけとなるでしょう。

英語と取り組む第一歩は、何よりも、日本語と英語では、処理の手順が異なるという事実への認識におかなければならないといえるでしょう。この認識は果たして行われてきたのでしょうか。

3. 日本人はなぜ英語が苦手なのか、(2/2)

以上の状況をまとめると、

1. 言語として違いすぎる：

モノの観方や考え方の違いから発して、日本語と英語（西欧語全般）の構造、つまり表現する順序が違いすぎるので、受信・発信の処理が極めて難しい。英語が苦手なのは当たり前と言えるでしょう。

2. 教育方針と方法の誤り：

この違いに正面から取り組み、学習の解決策を図るのではなく、また、なぜ英語を学ぶのかという目的を明らかにしないまま、無理やり英米の「文化英語」の学習を押し付けたり、英語を日本語で処理するやり方ばかりを教えているのが、学校での英語教育と言えるでしょう。これでは、大半の生徒、学生が英語嫌いになるのは当然のことです。

3. なんでも日本風味付けする：

日本人は、海外の文物の取り込みは大好きであるが、すべて日本風味付けをしないと受け取らないという文化風土の中で何千年生きてきています。これは大きな利点であると同時に、海外の文物を生のまま受け止め、対決する厳しい姿勢に欠ける結果となっています。

4. 何でも日本語で理解する：

日本語の構造上の柔軟性とカタカナという便利な道具のお蔭で、そして上で述べた文化風土と知識への強い需要のもとで、自然科学から哲学まで、世界の政治経済から芸能の出来事まで、何でも日本語で学び、情報を入手することができます。これが近代工業化成功の原動力となり、同時に、自分の都合のよいようにし

か世界の物事を受け止められない「島国人」を作りだしています。

4. 文化と言語について

ある程度まで同一的なモノの観方や考え方を共有している集団は、同じ文化を持っていると見なすことが可能でしょう。その、モノの観方や考え方は、言語で表現されます。同時に、人は言語でもって「考える」ことをします。従って、文化と言語は極めて密接な関係があり、一つの文化を共有している集団は、母国語もほぼ共有していると見なすことができるでしょう。文化が言語を生み、言語が文化を育てると言われるゆえんがここに 있습니다。

その人の母国語とは、その言語でものを考えているのがそれで、例えば、厳密な意味で、「バイリンガル」と呼ばれる人は、二つの言語で、どちらでも考えることができる人を指します。私、篠原自身の思考は日本語で行っているので、母国語は言うまでもなく日本語ということになります。その他の言語は意識して学習した外国語、どこまで行っても外国語に過ぎません。

モノを観る方式は、言語の構造に反映されます。モノを考える順序は、そのまま言語の順序に反映されます。これによって、人は快適に観察し、考え、それらを話し、書いているわけです。快適に、というのは、頭の中で衝突を起こしたり混乱したりせずに、意識せずに行えるという意味で使っています。

5 西欧文化から、モノの観方、考え方と言語を知る

単純化を恐れずに、西ヨーロッパの人々の、モノの観方、考え方を一まとめにすると、以下ようになります。西ヨーロッパからアメリカ大陸に移住した人々も当然この中に含まれます。

1. **自分の確認**：自分は何者であるかの確認を、他者との比較において、絶えることなく続ける、それを機会あるごとに表明（宣言）する。
2. **環境の中の自分**：自分が、ある環境の中で、何を、何のためにしているのかを、

絶えず確認し続け、機会あるごとにそれを表明する。

3. 客観：自然および他者を、自分と対立する客体 (Object) として、客観的に (objectively) 観察し、分析し、評価し、報告する。ここから、自然科学が生まれ、発展する。また、人間が構築した社会も同じように眺め、分析し、評価しようとする。ここから、科学かどうかに疑問は残るが、社会科学という分野が生まれる。

4. 客体 (Object) への働きかけ：自分が、自然や他者に対して、何を、何のために働きかけているのかを絶えず確認し、それを機会あるごとに表明する。

5. 情報重視：これらの基本姿勢から、自然や他者に関する報告を重視し、その情報収集に勤め、それを分析評価する作業 (インテリジェンス) を重視し、そこへの働きかけを、戦略的計画の下に行うという形が出てくる。

(余談)：すべて自己から発しているために、しばしば、自己に都合の好い色眼鏡つき分析をして、失敗するという副産物もあります。

6. 日本文化から、モノの観方、考え方と言語を知る

私自身を含めて、日本人のモノの観方や考え方を、単純化をおそれずに言わせてもらえば、以下ようになります。

1. 溶け込む：自然・環境の中に溶け込んで存在している自己を確認し、その自然・環境の説明をつけて、自分の存在を「控え目」に表明する。つまり、自然を客観的に眺めることはせず、その中に溶け込み、自然と一体化する。当然、ここからは、自然科学は生まれません。*進んで表明を行うものは「厚顔」とか言われ、あまり良い評価を得られない。

2. 同列・対等：人間以外の生物を含めて、自分と同列の、つまり対等の存在と認め、その相手との関係の中で自分の存在を確認する。自己表明は、従って、相手の存在を意識し、調和を最優先してなされる。つまり、常に全体の中の自分という図式での確認であり、全体を語らずして自己を語ることは難しい。

(余談) : 西欧の人には、どうしても理解できない考え方として、例えば、戦争という人為的厄災(空襲とか) さえも、地震とか台風のような自然がもたらす災害と同列に受け止めてしまうという、日本人に基本的な対応の仕方がある。

(余談) : また、古い話で恐縮だが、第1次の南極観測隊がやむを得ず犬を置いて帰国した時の、日本人と西欧人の反応の違いにもこのことは見られる。われわれは、犬達を仲間として(自分と同列の存在)、せめて鎖を外してやっておけば、と痛恨の思いがした。西欧人は、何たる動物虐待と強い非難を投げてきた。連れて帰れないのなら、どうして殺さなかったのか、というわけだ。彼らにとっては、自己から見て犬は客体としての家畜であり、その生殺与奪は飼い主の責任ということになる。責任を果たさぬ残酷な動物虐待の日本人となってしまうわけだ。

7. 日本語と英語の違い

以上のように、文化の違い、つまり、モノの観方や考え方の違いは、当然言語の違いに反映されています。それは、言語の構造の違いと、表現の順序の違いとなって現れています。

1. **英語の特徴は**、日本語と比較した場合、以下の二点に現れています。

(1) 主体 (Subject) 抜きでは事が始まらない。S が何であり、それが何をしているのか (V)、客体 (Object) に何を働きかけている (V) のかをはっきりさせる。流れも、このSVOに固定される。モノの観方の基本形であるから、この順序は変えられない。

(2) 自分が何者であるか、先ず主張し、その後で解説を加える。つまり重要なことを先に述べ、次第に瑣末の事項へと続く

2. **日本語の特徴は**、主体が全体の中に溶け込んでいるので、Sを表面に出さなくとも、言語として成り立つ。しかも、全体の説明から入るので、Oを先頭にでも、途中にでも配置でき、何をどうしているのか、Vを一番、最後に置きさえすれば、その途中は自由に並び替えできる。

同じく、全体の中の自分ということから、全体を説明してから主張なり結論を述べる。これは、存在の基本形であるから、言語においてもこの順序は変えられない

い.

(余談): 日本語には主語(subject)が無いと、極端な意見を吐く人もいますが、主語が無いのではなく、表に出さなくとも言語としての形を取れるということです。つまり主語は存在するのだが、あからさまに表に出すことを控える、出さなくとも理解してもらえる文化の下での言語。

8. 従来 of 英語教育 of 誤り (1) 英文和訳

日本人はなぜ英語が苦手なのか、長年勉強をしてきているのになぜ身に付かないのか。その基本的な原因は、もともと、言語の処理手順があまりにも違いすぎるところにあることを見てきました。

さらに、英語の教育方法に大きな誤りがあり、ただでさえ困難な英語修得という課題に、大きな混乱をもたらしてきており、いまだに改善されていないようです。以下にその要点を示したいと思います。

1. 英文和訳: 日本での英語教育の最大のガンは、英文和訳という「学習」を強いているところにあると思われます。この作業は、英語文章を、日本語処理装置(日本語オペレーティングシステム)にかけ、日本語処理手順で英語文章を「解体」し、日本語順序に並べ直して、日本語文章として表現することにあります。

日本語処理の頭で英語に接している場合、既にそれは言語としての英語ではなくなり、解剖対象の物体のようなものとなってしまっているでしょう。英文和訳の勉強は、英語の教科というより、むしろ国語の教科というべきでしょう。

2. なぜこのような学習方法が: 日本人は、歴史以来、外国から事物、概念、システム等を輸入して利用するとき、すべて「日本風」味付けをするという文化的習慣があり今も続いています。この習慣は、もちろん多くの面で利点として作用し、その結果、日本という存在の確認証明は保持されてきました。

一方、欠点も当然あり、その最たるものは、海外の思想、概念、制度、システムといったものを「自己流に」理解し、それで理解したと思い込むところにあります。生のままな板にのせて、その本質を分析してやろうという対決の姿勢は出

てこないのです。

9. 従来の英語教育の誤り (2) 言語として扱っていない

人間は言語を基盤にしてモノを考える、と述べてきました。そして、自分の考えを言語で表現します。従って、母国語以外の言語でモノを考え、その結果を表現するということは、特に日本語のように、西欧言語とその処理手順が大きく異なる言語を母国語としている者には、大変な難事業となります。それでは、日本における英語教育は、どのような目的で、中学一年生から義務教育としているのでしょうか。以下に、若干の考察を記します。

言語として扱っていない?一つの考えを表現するには、そこに、言語として必要なまとまり、つまりセンテンスを形成していなければなりません。他とのつながりを持たない単語だけを並べても、そのレベルでは、何を言わんとしているのか相手に伝わらないので、まだ「言語」にはなっていません。

(余談)：脈絡のない単語でしか表現できない人は、言語能力以前に、思考能力に欠けると見なされます。

日本語処理手順の上でいくら英語を解剖しても、言語としての英語が身に付かないことは既に記しました。同時に、英単語とそれに相応する日本語単語のデータベースを頭の中にいくら増やしても、つながりを表現できなければ、それはまだ言語にはなりません。

それでは、日本の学校での英語教育は、生徒・学生にいったい何を学ばせ、身につけさせようとしているのでしょうか。

日本語は英語と比べると劣性なので国語を英語に変える?外国人と道で会ったら「ハロー」と言えるようにする?海外でハンドバックのお買い物ができるようにする?米国に移住できるようにする?教養を高めるため、少しは英語が分かるようにする?結論として、教育意図は、どう考えても明らかではないのです。

10. 従来の英語教育の誤り (3) 文化英語の押し付け

英語には二種あります。一つは、いうまでもなく、英語を母国語としている人々が使う英語（文化英語）です。もう一つは、母国語を異にする人々の間で、コミュニケーションを取るための手段として、唯一のものとして、（仕方なく）使う英語（国際共通語）です。

日本の英語教育は、そのどちらを習得させようとしているのでしょうか。

アレルギーを起こさせるため？：処理手順が大きく異なる言語を学ぶことは、大変なことであることを述べてきました。その上に、さらに、文化としての英語を押し付けられれば、先ず大半の人はアレルギーが生じるでしょう。

イギリスや米国の文化が、外国人に分かるわけもなく、発音が同じようにできるわけもないのですから、生徒・学生全員が「英文学者」になることを目指しているのなら話は別でしょうが、何で、文化に深く根差した慣用的な言い回し（イデオム）などを教室で勉強しなければならないのでしょうか。

英語を嫌いにさせるための嫌がらせが、1945年の戦争終結以降60年にわたって、いまだに学校で続いているのではないのでしょうか。

学校で英語教育が必要というのなら、基本としては、英語というものを題材にして、言語というものに興味を持たせ、結果として日本語の能力を向上させることにあるのではないのでしょうか。

国際化した社会の中で、その前線で仕事をしたい者には、コミュニケーションのツールとして、国際共通語としての英語処理能力を身に付けさせることでしょう。

英米の文化、社会、文学等に専門的興味がある者は、大学で専門的に学べば良いし、ルイビトンのお買い物ができるようになりたい人には、街の英会話教室が用意されています。

11. 解決策：(1) 先ずは、文明としての英語を習得する

文明の説明、表現は、つまり技術や社会システムなどは、世界に普遍性を持つ「文明」といえるものです。これらを英語で表現できるようになることが、最初の目的となります。表現できなければ権利も主張できませんし、説明責任も果たせません。

(余談)：個性と文化に深く根差した事柄や性質を、外国語で表現するということは、極めて高度の課題であり、ここでの目的ではありません。

技術は、その原理、法則を頭で理解することができれば、民族、文化の違いに関係なく、人類の誰もが修得できるものと言えます。つまり、普遍性があり、その意味で「文明」あるいは「文明言語」と言えるものでしょう。

世界の唯一の共通語としての英語も、誰でも学ぶ意欲さえあれば、開かれているものとしての普遍性が高く、好むと好まざるに関係なく、一つの文明と言えるほどのものになってきています。

文明であるからには、標準性は日々強まり、ますます頭で理解し修得しやすい対象になってきていると見ることができます。もちろん、一つの言語ですから、どこまで行ってもその文化の根っこは消えないわけですが、意思疎通の手段として、使う人の数が増え続ける限り、文化の香りはどんどん消えていく、つまり標準性、普遍性、開放性を高めて行くことは間違いのないところでしょう。

我々が業としている特許業界における特許明細書の作成 (パテント)は、技術を言語で表現したものに対して、その権利が与えられます。文明である技術を、言語で権利主張するためには、文明である英語で表現するしかない、という状況になりつつあります。世界の中で、ほんの少数しか理解できないフランス語や日本語で表現されているのは、普遍性は得られず、従って普遍的な権利主張はできないこととなります。

ここにおいて、英語を母語とする人々は圧倒的に有利であり、英語と同じ言語体系の西欧の人々はまだしも、まったく体系の異なる日本語を母語としている我々日本人は、極端なまでに不利な条件を強いられていることとなります。

12. 解決策：(2) 英語 OS をインストールする

繰り返し述べますように、思考方式と言語は表裏の関係ですから、考え無しに別の言語を頭の中に取り入れると、混乱をきたして、思考方式、思考力そのものまでも壊しかねません。

その人の他者に対しての存在証明、自己に対しての存在確認の一つは、母国語である言語ですから、母国語の土台を侵食しかねない外国語の取り入れは避けなければなりません。一方、世界の中で存在し、あるいは企業という集団で闘うには、共通語である英語を扱えるようになる必要があるわけです。それでは、どうすればよいのでしょうか。

英語OSをインストールする：乱暴な意見に聞こえるかも知れませんが、解決策としては、頭の中に、日本語とは別にもう一つ、英語を処理するオペレーティングシステムを搭載するしかないと思います。

日本語OSの上で、日本語と英語という二つのウィンドウを開いて処理しようとしても、二つの言語の間での変換処理は極めて難しいものになるでしょう。処理するのに時間をかけることのできる、「読み書き」の場合はまだしも、リアルタイムで処理しなければならない、「聞く、話す」場合には、余程、高速大容量の並列処理機能でも持たない限り、変換処理は追いつきません。

それ以上に、受信の時には、日本語風に（自分の都合のよいように）理解してしまう（理解したと思い込む）危険性、発信の時には、日本語風の表現となり、相手に誤解させてしまう（あるいは理解されない）危険性がこのやり方には潜んでいます。相手の意図するところを見抜けなければ、戦いは負けます。当方の言わんとするところが伝わらなければ、せつかくの努力も無駄になります。

13. 解決策：(3) 英語のルールで闘うしかない

ここまでに述べてきましたように、世界で唯一の共通語は英語ですから、オープンな世界、例えば特許等の知的財産の世界で闘うには、英語でやり合うしかありません。

試合の規則は、残念ながら、英語に基づいており、その英語は西欧の思考方式に土台を置いています。力関係からみても、日本語の特異性から見ても、日本語が世界のルールになる可能性はありません。

では闘い方をどうするか: 相手が定めたルールで闘う時、相手のやり方を丸ごと取り込んでしまう危険性があります。日本語より英語の方が優れていると、思い込んだり、考え方まで相手の方式、ここでは西欧式、になってしまうなどの極端な例もありえます。この場合は、自ら進んで、自己の存在確認証明を放棄してしまっていることになります。

言語と思考方式が表裏であるだけに、言語を習得する、利用する時の危険性は常に存在します。また、表裏であるだけに、異なる思考方式の上に言語だけを取り替えて表現することは、多くの場合理解されえない結果となるでしょう。*純日本風思考方式の上に日本語で表現されたものを、形だけ英語に変換しても、他国の人には、特に、考え方の違いが存在することに不慣れな米国人には、何が主張されているのかは、理解されないでしょう。

自分を失うことなく、ルールは英語式で闘うには、試合に臨むときだけ、普段の方式、つまり自分のオリジナル方式を、一時しまっておいて、意識的に、人工的に作り出した処理装置で、つまり英語OSを稼働させて処理するしかないのではないのでしょうか。

14. 「英語 OS」のインストールの方法をどうするか

構造を性的に把握し、構造的に構築する

英語OSを頭の中に組み込む作業の第一は、英語文章の構造を理解するところから始まります。構造を静的に把握し、自分で表現する時には構造的に構築するように心がけます。

(1) SVOに分ける

英語は、ご承知のように、Subject (S) - Verb (V) - Object (O) で構成されます。これらを、モジュールという単位でひとまとめにくくります。

(2) 骨格を確認する

英語の文章は、骨組みを構成する SV0 それぞれのプレイヤーとそれらを修飾するサポーターで構成されます。プレイヤーの役割は、「S が V する O を」の基礎を述べることにあります。サポーターの役割は、それぞれを、「どこで、いつ、どのように、なぜ」を具体的に説明補足（修飾）することにあります。プレイヤーとサポーターの存在を区別するためにも、モジュールの中をさらにコンポーネント単位に分割します。分割したものを、縦に並べます。これにより、先ず、構造、つまり基本の骨組み（プレイヤー）とその装飾部（サポーター）の組合せがはっきりと見えるようになります。

(*) SV0 は、英語の文法で習ったものです

(*) 英語は主部と修飾する者たち (modifier) に分けられるということは、次の教科書から教えられたものです。

「Basic Grammar for Writing」 Eugene Ehrlich McGraw-Hill

(*) モジュール、コンポーネント、縦に並べる という概念の導入は、篠原のオリジナルです。

15. 日本語は、世界の知的財産の一つである

日本語は、数千年の歴史をかけて磨き上げてきた優美な言語であり、西欧の言語がローマ文明の力を借りて（ラテン語）その洗練度を上げたように、日本語も中国文明の力を借りて、つまり多くの言葉と漢字という文字を輸入してその洗練度を上げてきました。

(余談)：中国の知的財産である文字と、その文字で表された概念を有史以来無料で使ってきたので、その使用料を払えといわれると莫大な額になるだろうという笑い話があります。

しかし、西欧の言語のように、狭い地域で互いに刺激しあいながら磨いてきたのと違い、かつては中国からの輸入、幕末以降は英蘭独仏語の輸入以外は、日本語は自分達だけで磨いて来なければならなかった苦勞もありました。結果として、日本語は世界の中で、特異ではあるが上質の、叙情的ではあるが論理的表現も可能な、極めて有用な言語としてその地歩を保持しています。世界の知的財産の一つと言えるでしょう。

文化が言語を生み、言語が文化を育てるわけですから、全体として、日本語は磨き続けなければならないし、一人一人にとっても、思考と言語が互いに深く関連しているものである限り、日本語を扱う能力の向上は必須の課題です。

その意味で、思考力と言語力がまだ発展途上の幼児や小学生の時から外国語を学ばせることは無意味であるだけでなく、極めて危険な試みといえます。

個々の親が何を考えるか、それは勝手ですが、国の施策として出すとなると、暴挙というか、馬鹿というか、表現に困る主題と言えるのではないのでしょうか。また、英語やフランス語と比べると日本語は程度が落ちるといっている人もいますが、本当にそういう人がいるなら、その知能程度が疑われます。

追補：英語 OS のインストールの具体的方法については、この後「英文解体新書 英語 OS インストールマニュアル（仮題）」の作成を進めて行く予定です。時間が掛かりますが、研究所の皆さんにお読み頂き、賛同を頂けるマニュアルにしたいと思っています。（2002年3月9日 篠原泰正）